

辛夷 Magnoliae Flos

(基原) ³³⁾

タムシバ *Magnolia salicifolia* Maximowicz, コブシ *Magnolia kobus* DeCandolle, *Magnolia biondii* Pampanini またはその他近縁植物 (Magnoliaceae) の花蕾を乾燥したものである。

(由来) ⁷⁾¹³⁾²⁰⁾

辛夷の夷は、萼 (ススキのツバナ或いは柳の穂) の意味があって、この木の苞が萼のようで、噛むとピリッと辛い味がするところから、辛夷と呼ぶようになった。

(別名)

『神農本草経』

辛雉 (しんち) 候桃 (こうとう) 房木 (ほうぼく) ^{2) 12) 13) 14) 15) 36)}

『本草拾遺』 陳蔵器 木筆 (もくひつ) 迎春 (げいしゅん)

花がまだ発かぬ時は、苞が小桃子のようで毛がある。故に候桃と名づける。

初めて発くと筆の頭ようなので北方地方では木筆と呼ぶ。その花が最も早いので南方地方では迎春と呼ぶ。 ^{2) 6) 14) 15) 36)}

辛雉：雉は夷と同意語でキジという字 木筆：形態が筆の頭に似ている

候桃：小さな桃の実のような毛がある 迎春：春早く真っ先に花が咲く ⁷⁾

(日本における来歴)

日本で辛夷に和名を与えたのは『和名抄』(914) である。日本に産する蕾が拳のようで辛味があり、しかも山林で早春に目立つ花をつけるので、中国の文献にある辛夷に当てたものであろう。 ³⁸⁾

ヤマアラギ 『大和本草』 『和名抄』 『医心方』

コブシハジカミ 『和名抄』 『医心方』 『多識偏』 ³⁷⁾

「アラギ」は「ノビル」で、「ハジカミ」は「サンショウ」のことで共に辛く、コブシの果実が辛いことからこの名が付いた。 ³⁷⁾

江戸時代初期から「コブシ」を辛夷に当て、その花蕾を薬用として来たが、よく似たタムシバの花蕾とを区別しないで用いられたと思われる。 ³⁷⁾

日本特産であるコブシ、タムシバを「辛夷」という漢名を当てたのは、恐らく植物、花の形状、などが類似し、近縁種の為、種類を気にせずに当てたものと解釈する。 ³⁷⁾

『大和本草』(1709) 貝原益軒^{2) 6) 27) 37)}

辛夷にコブシのカナをふっているのので、このころ辛夷=コブシが定着した。³⁸⁾

「玉蘭花、花紫白二種あり国俗紫を木蓮といい花色あしし、白を白木蓮という。花白を好とす」を外国品として記してあるから、その頃に入ってきたものであろう。^{38) 27)}

『用薬須知』(1726) 松岡玄達³⁵⁾

辛夷(和にコブシと云う)紫白の二種あり云々。
故に中国本草の辛夷とは同一基原のものではない

『一本堂薬選』(1729) 香川修庵³⁵⁾

『古方薬品考』(1841) 内藤尚賢³⁵⁾

『増補能毒』(1852) 長澤道寿³⁵⁾

『古方薬議』(1861) 浅田宗伯³⁵⁾

以上には辛夷の記載はない

『本草綱目啓蒙』(1802) 小野蘭山³⁸⁾

辛夷にコブシ、コボウシ(越前)、コボシ(丹波)をあげている。

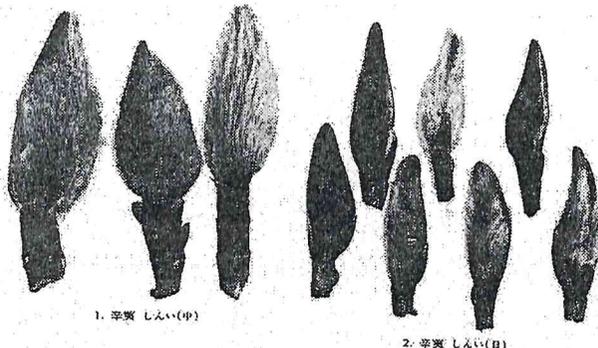
<和名の由来>コブシ：蕾の形が拳に似ている所から名がついたとされる。¹⁶⁾

タムシバ：時々葉面にタムシ状の斑点ができる事にちなむ。¹⁶⁾

(性状)^{24) 33)}

倒円錐形で、あたかも毛筆の先のような形をしており、基部には木質の花柄がついている。つぼみの長さ 1.5~3(1~4)cm、中央の太さ 0.7~1.5(0.7~2)cm、包葉 3(or2)枚で二層からなり、層間に小芽りんを認める。包葉の表面は、灰色または黄緑色のやわらかい絹様の長毛を密生し、内面は平滑で黄褐色を呈する。質はもろく破損しやすい。内部に 9 枚の花被片と多数の雄ずい及び雌ずいがある。特有の芳香を有し、味は辛くやや苦い。(タムシバ、コブシ)

下図：原色和漢薬図鑑(下)より



(産地)²⁾

中国 (四川、河南、湖南、安徽、湖北省などに主産し、四川、江南省が産量大である。わが国への輸入品は河南省のものである。)

日本 (福井、富山、石川、長野県など)

韓国

東医研では日本産 (秋田) のものを使用。

中国産：モクレン科 (Magnoliaceae) の *Magnolia fargesii* CHENG (= *M. biondii* PAMP., *M. aulacosperma* REHD. et WILS)、モクレン、シモクレン *M. liliflora* DESR. (= *M. discolor* VENT., *M. purpurea* CURTIS)、ハクモクレン *M. denudata* DESR. (= *M. conspicua* SALISB., *M. yulan* DESF) などの花蕾を乾燥したもの。現在日本に輸入されている辛夷は *M. fargesii* を基源とする。中国市場では、望春花 (湖北、江蘇、福建、浙江)、木筆花 (陝西)、白花樹花 (湖南)、会春花 (四川)、春花 (江蘇、浙江) などとも称する。

日本産：モクレン科 (Magnoliaceae) のタムシバ *Magnolia salicifolia* (SIEB. et ZUCC.) MAXIM の花蕾を乾燥したもの。従来和産辛夷はコブシ *M. kobus* D. であるされていたが、現在の市場品はすべてタムシバである。

韓国産：モクレン科 (Magnoliaceae) のハクモクレン *M. denudata* DESR. の花蕾を乾燥したもの。

(生産)

日本産辛夷は年間4トン内外を生産しており、中国産辛夷を年間およそ15トン輸入している。³¹⁾

(品質)

【灰分】5.5%以下³³⁾

【酸不溶性灰分】1.5%以上³³⁾

【精油含量】本品粉末50.0g中、0.5ml以上である。³³⁾

【選品】開花前即ち正月頃にとった花蕾で、内部の充実した、なるべく大きいものがよろしい。²⁶⁾

芳香性の強いものが良い。花梗をつけたものは、それを除いて用いる。

(タムシバ)¹⁸⁾

灰褐色絹様の光沢ある柔毛を密生し、つぼみが開かず花梗の少ないもので、くだけば芳香を発する乾燥した新しいもの。(コブシ)²⁴⁾

日本産辛夷は、中国品に比べ柔毛が少なく、潤いにかげ、品質は劣る。
 2) 国産品はやや小型ながらも香りが高く良質である。7)

(成分) 2)5)

精油： cineol (I)、citral (IV)、 α -pinene (II)、methylchavicol (III)、eugenol など

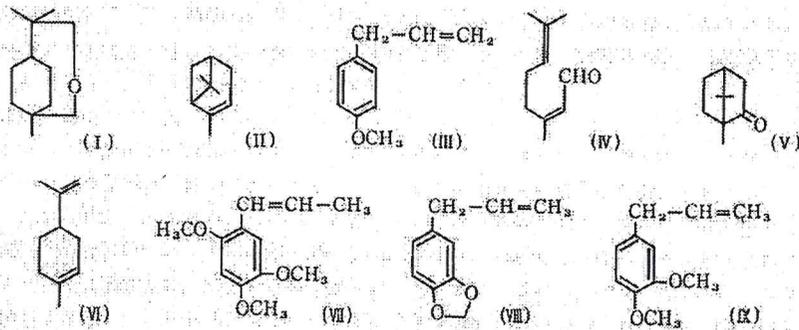
アルカロイド：d-coclaurine、N-methyl coclaurine、d-reticuline など

有機酸：palmitic acid、linoleic acid、linolenic acid、vanillic acid など

各種 Magnolia 属植物花蕾の精油は次表の通りである。

植 物	精油収量	α -pinene	cineol	methylchavicol	citral	eugenol	未同定
コブシ	3.34	++	+++	++	+	-	±
キタコブシ	4.69	+	+++	++	±	-	±
シデコブシ	1.24	++	+++	++	-	-	
タムシバ	4.86	+	+	+	+++	±	±±±
ハクモクレン	4.08	+++	+++	±	-	-	++
サラサモクレン	1.45	++	+++	±	-	-	±±±
ソトベニモクレン	0.84	+++	++	-	±	-	±±±
モクレン	0.26	+++	-	±	-	-	±±±
中国産辛夷	2.96	+	+++	+	±	-	±±±

タムシバの花蕾の精油は、産地によってその主成分を異にし、中部、近畿および中国地方産のものは citral, 九州産のものは camphor (V) と limonene (VI)、石川県産は asarone (VII), 関東, 奥羽中南部産は camphor と safrol (VIII), 奥羽西部、秋田新潟地方産は camphor と methyleugenol (IX) をそれぞれ主成分とすると報告されている。



(現代薬理) 5) 14)

- 筋弛緩作用：d-coclaurine, d-reticuline は、錐体外路系の神経伝達物質であるドパミンの受容体遮断作用を示した。また、水製エキスは低濃度ではアセチルコリンに対する抑制作用を示すことも認められている。
- 抗アレルギー作用：辛夷エキスは、ラットの 48h homologous passive cutaneous anaphylaxis (PCA) 反応において、Evans blue の漏出を抑制した。また、ラット腹腔内肥満細胞の compound 48/80 によるヒスタミン遊離を抑制した。リグナン成分類は、egg-albumin 感作モルモット摘出気管支平滑筋収縮および、モルモット摘出気管支平滑筋におけるアラキドン酸収縮を抑制した。
- 抗炎症作用：マグノサリン、マグリシニンなどはマウスのアジュバント誘発肉芽嚢法にて、血管新生や肉芽形成を抑制した。また、慢性関節リウマチ (RA) は関節滑膜を病変の主座とする増殖性慢性炎症疾患である。その滑膜細胞の異常増殖を抑制することによって、新たな抗リウマチ薬が期待し、RA モデル動物である MRL/lpr マウスの滑膜細胞を用いて、in vitro の増殖抑制作用を試験したところ、マグノサリンに培養滑膜細胞の増殖抑制が認められた。
- 抗腫瘍作用：メタノールエキスは、マウス骨髄性白血病細胞の増殖を強く抑制した。
和漢薬学 防己黄耆湯加辛夷
- 育毛作用：毛再生速度と相関性のある明度を測定し、辛夷のマウス毛再生速度に対する作用をみた。動物レベルで毛再生速度促進物として知られている TPA (12-o-tetradecanoylphorbol-13-acetate) を positive control として、マウス背部脱毛後、熱メタノール抽出物塗布により毛再生速度が増加することが認められた。マウス背部皮膚の表皮層 rich な画分と真皮層に含まれる ornithine decarboxylase (ODC), glucose-6-phosphate dehydrogenase, alkaline phosphatase それぞれの活性は TPA 塗布後数時間で特異的に上昇させた。辛夷の熱メタノール抽出物によるこの3種の酵素活性の上昇を認められたことから、辛夷の毛再生促進効果はこれらの作用メカニズムが考えられた。
- 抗真菌作用：辛夷煎液は in vivo において病原性皮膚真菌に対し強い抗菌作用を示す。

(古典的薬効)

効能：散風通竅^{5) 9)} 散風解表・宣肺通鼻¹⁷⁾ 解表、通竅¹⁹⁾
薬味：辛^{2) 5) 13) 15) 16) 17) 19)} 薬性 (気)：温^{2) 13) 15) 16) 17) 19)}
帰経：肺・胃^{9) 15) 17)}

風と寒を散じ、竊（鼻腔）を通ずるといわれる。一般に鎮静、鎮痛、消炎を目標とする。鼻淵（蓄膿症、副鼻腔炎、慢性鼻炎）による鼻づまりや頭痛、膿性鼻汁つまり膿の混じった濃い鼻水に用いられる。⁷⁾

発散の薬とされているが、一般に風寒外邪の表症には用いられていない。²⁾

『神農本草経』 辛 温¹³⁾

『名医別録』 無毒¹⁵⁾

『本草綱目』 辛 温。 無毒。¹⁵⁾

主治：

『神農本草経』上品に記載

五臓の病や身体の悪寒と発熱をともなう寒熱病や、風気が頭に当たった風頭の病や、それがもとで脳の中まで痛む病や、面黦すなわち顔面の皮膚が黒いのをなおすことができる。これを久しく服用していると、上につきあげた気やとどこおった気を下し、だんだんと身のうごきも軽くなり、目が明らかに見え、年齢を増し老齢に耐えられるようになってくる。^{12) 13) 15)}

『名医別録』

中（脾胃）を温め、肌表の邪を解除し、九竊（口、両目、両耳、両鼻孔、肛門、尿道）を利し、鼻塞り、涙が出るのを通じ、顔面の腫れ歯痛をおこしたもの、めまいが重く、身はあてもなく車船の上にあるような気持にある者を治し、鬚髪を生じ、白虫（条虫）を除く。¹⁵⁾

『薬性論』

顔に生じた黦皤を治す。顔に脂として用いると、光華を主る。¹⁵⁾

『日華子諸家本草』

関脈を通す、目を明らかにする。頭痛、さむけ、体慄（寒さによる身震い）、かゆみを治す。¹⁵⁾

『本草綱目』

鼻淵、鼻軌（風を病んで鼻がふさがる）。鼻塞、鼻瘡には、いずれもこれを研末し、麝香を少量入れ、葱白につけて数回入れる。甚だ良し。^{15) 20)}

(臨床応用)

『濟生方』 辛夷散

「風寒湿熱の気を感じ、鼻内が壅塞し、鼻汁が出てやまず、不通或いは香臭不弁の者のを治す。」^{3 5)}

細辛、白芷などを配合して、上部の熱を散じ、頭風、頭痛、鼻塞、鼻淵を治す。
2) 7) 16) [辛夷、白芷、防風、荊芥、細辛、升麻、蒿本、川芎、木通、生甘草の等分を粉末にして、1日2～3回6gずつ服用]^{2 3)}

『外科正宗』 辛夷清肺湯

「肺熱、鼻内瘰肉、初め榴子の如く、日後漸く大きく、孔竅を塞ぎ、氣宣通せざるものを治す。」

山梔子、黄芩などを配合して、炎症症状が強く乾燥している場合、あるいは化膿症状がある慢性鼻炎や蓄膿症に応用する。^{7) 19)}

『濟生方』 蒼耳散

蒼耳子と配合して通竅作用を有する。

鼻閉・黄色の鼻汁・頭痛などがみられ、舌苔が黄・脈が浮数のものに用いる。[蒼耳子3、白芷3、辛夷3、薄荷3g 水煎服]^{2 3)}

葛根湯加辛夷川芎 (本朝経験方)

風邪に罹患して鼻閉や鼻汁の症状がひどいときには葛根湯に配合する。¹⁹⁾

(その他)

修治(炮製)

『日華子諸家本草』(大明)¹⁵⁾

少し炙って用いる。すでに開花したものは劣り、しぼんだものは悪い。

配合と禁忌

『神農本草經集注』¹⁵⁾

芎藭が使となる。五石脂を惡み菖蒲、蒲黄、黄連、石膏、黄環を畏る。

『神農本草經疏』¹⁵⁾

氣虛の人は忌み、頭痛が血虛火熾に由来する者、齒痛が胃火に由来する者は服用してはならない。

『本草彙言』¹⁵⁾

気虚の人で偶然、風寒を感じ諸窮が通じなくなった者は服用してはならない。

(参考文献)

- 2) 原色和漢薬図鑑 (下) 難波恒雄著 保育社
- 5) 生薬ハンドブック ツムラ
- 6) 現代東洋医学 Vol.11 No.2 (1990.4)
- 7) 漢方製剤の知識 ツムラ
- 9) 漢薬の臨床応用 神戸中医学研究会
- 11) 本草備要
- 12) 神農本草経
- 13) 意积神農本草経
- 14) 和漢薬物学 大塚恭男 南山堂
- 15) 中薬大辞典 上海科学技術出版社 小学館編
- 16) 日本薬草全書 水野瑞夫 新日本法規
- 17) 中医臨床のための中薬学 神戸中医学研究会
- 18) 和漢薬の世界
- 19) 漢方のくすりの事典-生薬・ハーブ・民間薬-
- 20) 本草綱目
- 21) 原典に拠る重要漢薬 平成薬証論 渡邊武著 メディカルユーコン社
- 22) 原色牧野和漢薬草大圖鑑
- 23) 中医処方解説 神戸中医学研究会
- 24) 新常用和漢集 東京生薬協会 南山堂
- 26) 和漢薬の良否鑑別法及調整方 木村雄四郎 たにぐち書店
- 27) 薬草カラー図鑑①,②
- 31) 和漢薬の選品と薬効
- 32) 漢方薬理学 高木敬次郎 南山堂
- 33) 日本薬局方外 生薬規格 1989 増補版
- 34) 新訂 和漢薬 赤松金芳
- 35) 漢方の臨床 Vol.44 No.1 p81 1997
- 36) 漢方医学 Vol.4 No.8 1980.8, Vol.7 No.12 1998.12
- 37) 月刊 漢方療法 Vol.2 No.1 1998.4
- 38) 漢方の臨床 Vol.28 No.12 p747 1981



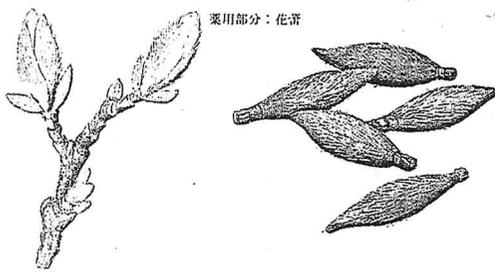
134. タムシバ(カムシバ, サトウシバ)
[モクレン属](もくれん科)

Magnolia salicifolia (Sieb. et Zucc.) Maxim.

【分布】本州、九州の特に日本海沿岸地方の山地に生え、しばしば観賞用に栽植される落葉低木で日本特産。【形態】樹高4~8m。幹は直立し、まばらに分枝する。葉は互生し、有柄で広皮針形か卵状皮針形で長さ6~12cm、薄い洋紙質、鋭頭で全縁、基部は広楔形。花期は4~5月。出葉前に大形の白色花をつける。【薬用部分】花蕾(辛夷<シンイ>)。開花前の花蕾を採集して日干しにする。【成分】花蕾にシネオール、 α -ピネン、メチルチャビコール、カシファー、サフロール、シトラール、オイゲノールのほか、オレイン酸、カプリン酸、ルチン、微量のアルカロイドなどを含む。【薬効と薬理】辛夷の水浸エキスに骨格筋収縮作用がみられる。中国産辛夷は日本産辛夷と基原が異なるが、骨格筋に対する作用が強く、作用の本態はアルカロイドと推定され、アルカロイド分画の末同定単一成分に神経筋接合部を遮断するd-ツボクラリン様作用も認められる。日本産辛夷の煎剤に含まれる水、エタノール可溶の非揮発性物質はラット、ウサギの摘出子宮、イヌ、ウサギの子宮に対して興奮作用、麻痺動物に対し降圧作用がある。また病原性皮膚真菌に対して強い抗菌作用を示す。辛夷は鎮静、鎮痛薬として頭痛、頭重、特に鼻炎、蓄膿症などに用いられる。【用法】頭痛、蓄膿症、鼻炎に、辛夷1日量2~5gに300mlの水を加え、半量になるまで煎じつめたものを3回に分けて服用する。また同様の目的で、葛根湯加川芎辛夷、辛夷清肺湯などの処方に配合される。

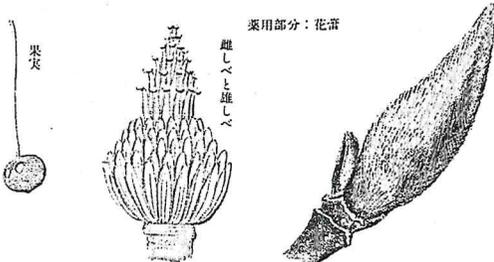
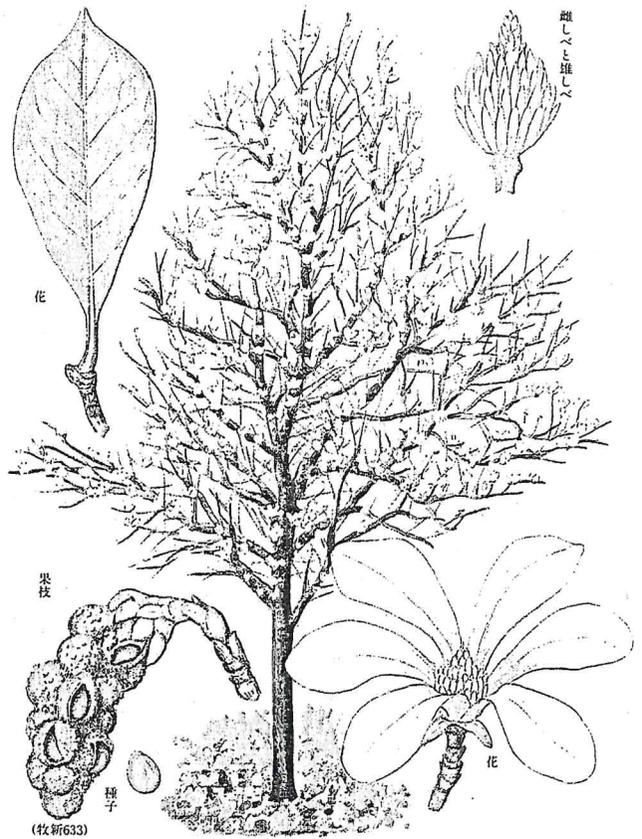
薬用部分：花蕾

(牧新634)



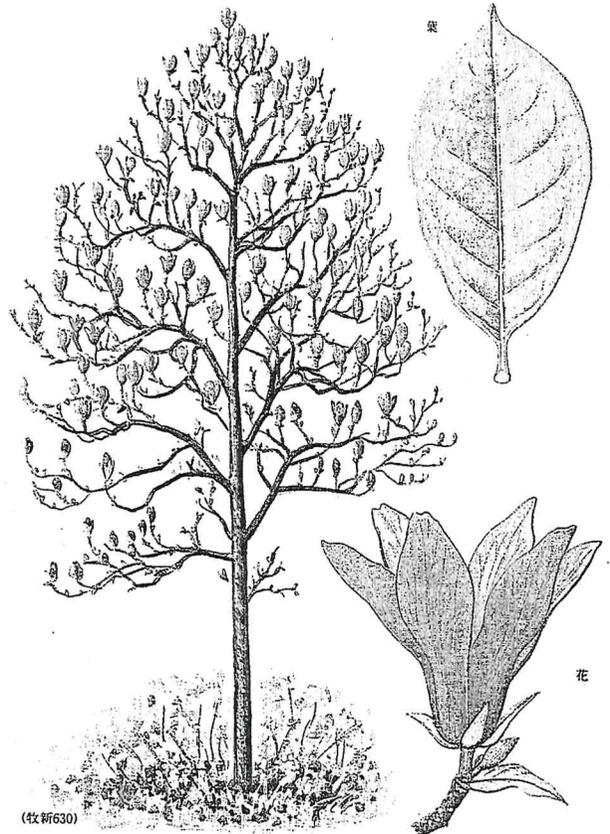
130. コブシ (ヤマアララギ, コブシハジカミ, イモウエバナ) [モクレン属] (もくれん科)
Magnolia kobus DC. (辛夷, 拳)

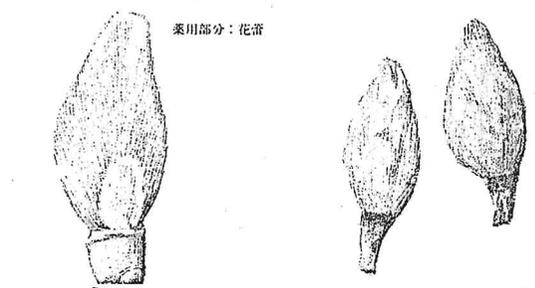
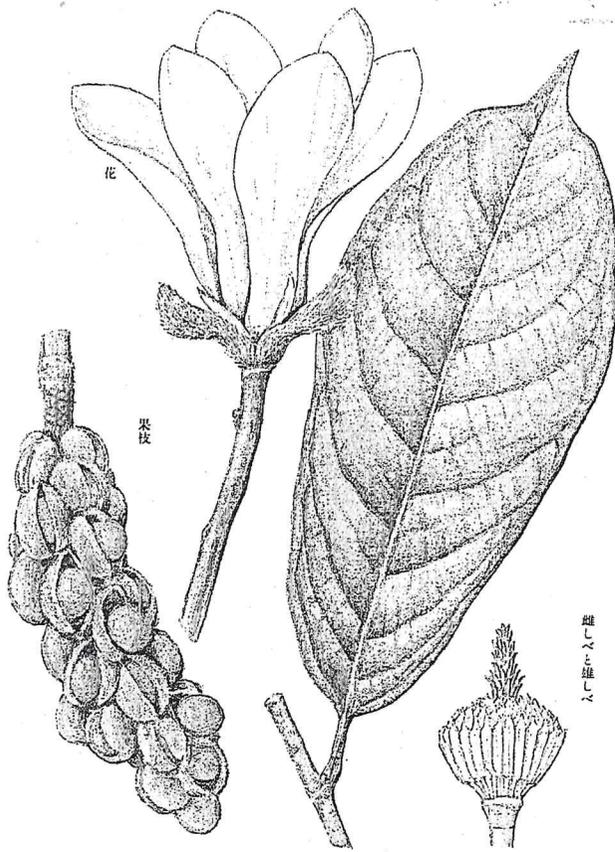
【分布】北海道から九州および朝鮮半島南部に分布し、山地に生え、庭木としても植栽される落葉高木。【形態】樹高20m。樹皮は灰色で小枝は緑色、折ると香気を放つ。葉は互生で短い葉柄をもつ。花期3~4月。新葉の生る前に枝先に径10~15cmの花をつけ、日が当たると平開し、香気がある。【薬用部分】花蕾(辛夷<シンイ>)。3~4月開花直前の花蕾を採取、通風のよい場所で陰干しする。【成分】シトラール、 α -ピネン、シネオールなどを含む精油、そのほかアルカロイドも少量含む。【薬効と薬理】辛夷の水浸エキスを骨格筋収縮作用があり、興奮発散、降圧、抗菌作用をもつ。鎮静、鎮痛剤として頭痛、歯痛、特に鼻炎、蓄膿症に有効とされている。【用法】辛夷15g、蒼耳子9g、白芷30g、ハッカ葉15gを細末にして、1回量6gを1日3回食後に水で服用する。鼻炎、蓄膿症にしばらく続けることよい。【その他】9~10月頃、袋果をつけるが、実をかむと辛味があるので、ヤマアララギ、コブシハジカミなどと呼ばれる。中国産の辛夷は、望春玉蘭 *M. biondii* Pamp., 武当木蘭 *M. sprengeri* Pamp., ハクモクレン *M. denudata* Desr., シモクレン *M. liliflora* Desr. などの花蕾であるが、日本ではコブシで代用していた。近年はコブシより香気の強いタムシバ *M. salicifolia* (Sieb. et Zucc.) Maxim. を利用することが多い。なお韓国産辛夷はハクモクレンの花蕾といわれている。



131. モクレン (モクレンゲ, シモクレン) [モクレン属] (もくれん科)
Magnolia liliflora Desr. (木蓮, 木蘭)

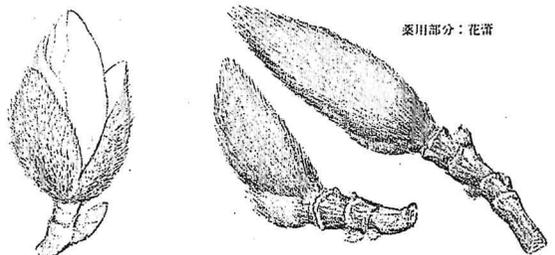
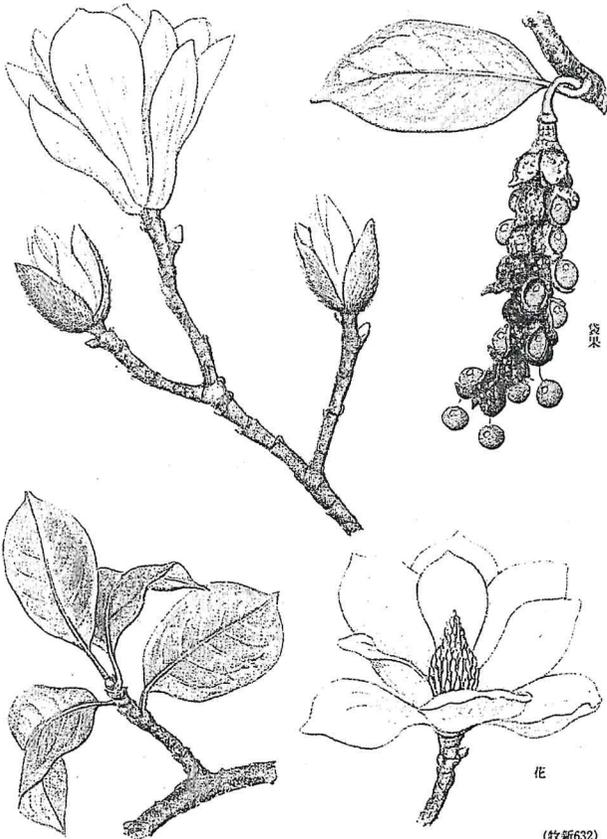
【分布】中国中部の原産で、日本には古く渡来し、現在は観賞用に庭園などで栽植される落葉大低木。【形態】樹高4m。幹は直立して分枝し、しばしばそう生ずる。葉は互生し、倒卵形から広倒卵形で長さ8~18cm、やや硬質で急短鋭尖頭、全縁。花期は4~5月。出葉前に暗紫色の大形の花を枝先に単生し、日照によって正開する。【薬用部分】花蕾(辛夷<シンイ>)。4~5月の開花直前に花蕾を採集し、軸を除いて通風のよい場所で日数をかけて陰干しにし、十分乾燥させる。【成分】花蕾に精油の α -ピネン、シネオール、オイゲノール、カブリン酸、オイレン酸、その他微量の未同定アルカロイドを含む。【薬効と薬理】辛夷の水浸エキ스는、アルカロイドによると思われる骨格筋収縮作用があり、アルカロイド分画の未同定単一成分に神経筋接合部を遮断するd-トボクラリン様作用がみられる。また煎剤は病原性皮膚真菌菌に対して強い抗菌作用があり、シネオール、オイゲノールに消炎作用がある。辛夷は鎮静、鎮痛、消炎薬として、鼻炎、蓄膿症、鼻づまり、頭痛、頭重感、めまいなどに用いられ、漢方処方でもしばしば用いられる要薬とされる。【用法】鼻炎、鼻膜炎、頭痛などに、辛夷1日量4gに200mlの水を加え、半量になるまで煎じつめたものを3回に分けて服用する。【処方例】辛夷清肺湯(外科正宗；辛夷、麦門冬、知母、石膏、百合、升麻、黄芩、枇杷葉、山梔子)などがある。





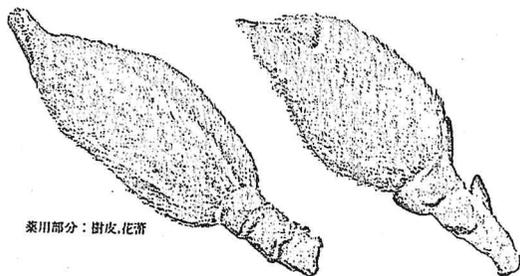
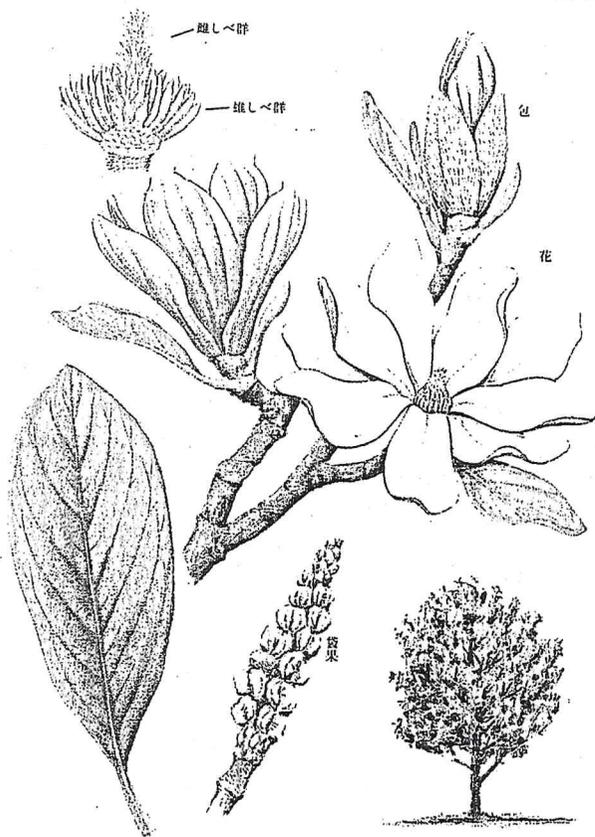
128. ボウシュンカ [モクレン属] (もくれん科)
Magnolia biondii Pamp. (= *M. fargessi* (Finet et Gagnep.) Cheng) (望春花)

【分布】中国の甘肅、陝西、湖北、河南、四川、湖南に分布し、比較的湿潤な山地に生育する落葉高木。【形態】幹は直立、分枝する。樹皮は淡灰色でなめらか。葉は互生し、楕円皮針形か卵状皮針形で短い柄がある。花期は3月、花は大きく単生し盞状で葉の着く前に開く。9月頃長さ8~14cmの集合果が実る。【薬用部分】花蕾(辛夷<シンイ>)。蕾がまだ開いていない早春に、蕾をとって乾燥させる。【成分】精油、アルカロイドおよびグナナン類のオイデスミン、リリオレンノールB-ジメチルエーテル、マグノリン、ファルゲシンなどが含まれている。【薬効】辛夷は漢方では鎮静、鎮痛、芳香を目的として頭痛、頭重感を伴う鼻炎、とくに蓄膿症の治療に応用される。【使用法】内服に1~3gを煎じて飲むか丸剤、散剤にして服用する。また外用としては、辛夷を粉末にして鼻に詰めるか、水に浸して蒸留した液を鼻に垂らす。【その他】辛夷の基源植物は中国では本種のほか、モクレン *M. liliflora* Desr., ハクモクレン *M. denudata* Desr., 湖北木蘭 *M. sprengeri* Pamp. などが用いられる。日本ではゴフシ *M. kobus* DC. またはタムシバ *M. salicifolia* (Sieb. et Zucc.) Maxim. を充て、朝鮮産はハクモクレンを充てている。なお、ボウシュンカの花蕾から得られた結晶(アルカロイド)はカエルの腹直筋の標本で、クラール様の作用があることが報告されている。一方、水煎剤は反対にアセチルコリン様の作用がある。



129. ハクモクレン [モクレン属] (もくれん科)
Magnolia denudata Desr. (白木蓮) (中)玉蘭

【分布】中国原産で、日本には古く渡来し、現在は各地で観賞用に栽培される落葉高木。【形態】樹高5~15m。幹は直立して分枝する。葉は互生し、短柄があり広楕形か倒卵形で長さ約10cm、鈍頭で短凸端、全縁で厚質。花期は3~5月。枝先に大形の白色の花をつけ、日照によって開き芳香がある。【薬用部分】花蕾(辛夷<シンイ>)、玉蘭(ギョクラン)。3~5月の開花直前の花蕾を採集し、軸を除いて通風のよい場所で、日数をかけて陰干しにし、十分乾燥させる。【成分】花蕾に精油の α -ピネン、シネオール、メチルチャピコール、オイゲノール、カプリン酸、オレイン酸、そのほか微量の未同定アルカロイドを含む。【薬効と薬理】玉蘭の水浸エキスには、アルカロイドによると考えられる骨格筋収縮作用があり、アルカロイド分画の未同定単一成分に神経筋接合を遮断するd-ツボクラリン様の作用がみられる。また煎剤は試験管内で病原性皮膚真菌に対して強い抗菌作用があり、シネオール、オイゲノールには消炎作用がある。玉蘭は鎮静、鎮痛、消炎薬として、鼻炎、蓄膿症、鼻づまり、頭痛、頭重感、めまいなどに用いられる。【使用法】蓄膿症、鼻炎に、玉蘭15gに蒼耳子9g、白芷30g、ハッカ葉15gを加え、ミキサーで砕いて細末にしたものを毎食後6gずつ服用する。【その他】繁殖は実生、つぎ木による。植付時期は4~5月か初秋。日当たり、排水の良好な場所に植え、肥沃な砂質壤土を好み、移植をきらい、栽培はやや困難。



薬用部分：樹皮、花蕾

135. マグノリア・スプレングリ

〔モクレン属〕(もくれん科)

Magnolia sprengeri Pamp. (= *M. diva* Stapf)

(中) 湖北木蘭, 武当木蘭

【分布】中国の四川東部, 東北部, 湖北西部, 河南西南部, 陝西, 甘肅各地方に分布し, 標高1300~2000mの山地の常緑樹と落葉樹の混材内に生えるほか, 観賞用に植栽される落葉高木。【形態】樹高約20m。樹皮は淡灰褐色で老成すると小片状に剝離する。小枝は淡黄褐色でのち灰色になり, 無毛。葉は互生し, 倒卵形で長さ10~17cm。急尖頭か急短漸尖頭で基部は楔形, 全縁。花蕾は灰黄色の絹毛が密生する。花期は3月。葉えきには大形花を単生する。【薬用部分】樹皮(川姜朴<センキョウボク>, 厚朴<コウボク>), 花蕾(辛夷<シンイ>)。樹皮は春~初夏にかけて採取し, 湯通しなどを行い, 日干しにする。花蕾は冬の終わりから春にかけて採集し, 陰干しにする。【成分】樹皮にリグナン類のマグノロール, ホオノキオールのほか, 精油中にオイデスマールを含む。【薬効と薬理】樹皮の精油には鎮静作用, マグノロールには抗菌作用のあることが知られている。厚朴は気のふさぎを除き, 痰を消す作用があるとされ, 嘔吐, 消化不良, 咳などに用いられる。辛夷は鎮静, 鎮痛薬として鼻炎, 蓄膿症, 頭痛などに応用される。【用法】川姜朴1日量3~9gを煎じて服用する。辛夷1日量3~9gを煎じて服用する。【その他】中国産厚朴は厚朴 *M. officinalis* Rehd. et Wils. および凹葉厚朴 *M. biloba* (Rehd. et Wils.) Cheng の樹皮が正品である。辛夷としては望春花 *M. biondii* Pamp. などの花蕾も用いられる。